2Ua－3

両大戦間における生活改善思想の形成と展開（第３報）
その家庭経営思想について (3)予算生活

奥田都子*　佐藤裕紀子**　○岡部千鶴***
（ *共立女大，　**お茶の水女大，*** 久留米信愛女学院短大　）

【目的】本報告では第１・２報に引き続き、生活改善への提言の中から「予算生活」を取り上げ、生活改善論における問題意識について明らかにするとともに、その理念と実践について考察を加える。

【方法】第１・２報と同じ。

【結果】①当時は、諸外国と比較して国民一人あたりの富力および貯金高の著しい格差が問題とされ、国力の増進が国を挙げての課題とされていた。その結果、生活の安定を期するため、一切の無駄冗費を省き、生活費に一定の予算を設けてその範囲内で生活を行うことが奨励された。

②とりわけ、無駄浪費のない科学的生活を推進し、生活を合理化するためには、主婦の果す役割が非常に重要であると強調された。家計簿の記帳や掛け買いを控えることなど、家庭内での責任は主婦にあるとされ、消費者としての立場の自覚と消費経済に対する知識の涵養が目指された。

③予算計画による生活が、毎月の貯蓄を可能にすると論じられた。特に、老後の生活や子供の教育などを目的とした貯蓄は、人としての重大な義務であるとされた。また、貯蓄の種類として、銀行預金や確実な有価証券の購入および種々の保険への加入が勧められた。

④一方、予算生活によって生じた余裕分を、社会奉仕や文化発展のために投じることの必要性が標榜された。私有財産の公共的事業への寄付などを論じたこの提言から、公共的事業の充実が時代の急務であったことがうかがえる。